

教員養成における「教育方法・技術」の充実化

—— 学生の「実技」の力量の育成を中心に ——

広瀬綾子

要旨

本稿では「教育方法・技術」の「実技」の学び・習得の重要性に着目し、その実技の一つとして「弦楽器・バンドーラ制作と合奏」を取り上げ、まず学生たちが学び習得すべき実技として、なぜ「弦楽器・バンドーラ制作と合奏」を重視して取り上げるのか、その理由について述べ、次に学生たちが、その「弦楽器・バンドーラ制作と合奏」をどのようにして学び習得するのか、その具体的な取り組みを明らかにした。そして最後に「弦楽器・バンドーラ制作と合奏」という「実技」の学び・取り組みによって、教師の道を進もうとする学生たちがいかなるものを得たのかについて明らかにした。

キーワード：教育方法・技術、弦楽器・バンドーラ制作と合奏、実技の学び

はじめに

「教え方を知らない教員」が8割¹と指摘され、「目の前の子どもの実態と教育内容に合わせ、多様な方法を使うのが教師の腕の見せ所だが、そもそも教師自身、深い学びができていない状況にある」²との指摘のなかで、それでも子どもたちは、成長の歩みを進めるべく学校に行く。一体、どうしてそのような教師・教員が多く存在するのか。その原因の一つとして、教員養成の不十分さを挙げることができる。

教員養成が不十分であるがゆえに、子どもの成長にプラスになる力を与えることのできる教師が育たないのである。その成長にプラスの力を与えることのできる教師とは、換言すれば、子どもの欲求あるいは発達段階を理解し、それに応じた適切な教育方法・技術を用いてその欲求を十分に満たすことのできる教師である。大学の教員養成ではこのような教師が育成されなくてはならない。

教員養成で重要なのは、大学生の適切な教育方法・技術の習得である。もちろん、教育思想・教育哲学の習得も大切である。しかしその習得のうえに、教育方法・技術の習得が十分になされなければ、子どもの成長に力を与える教師にはなりえない。

一般に「教育方法・技術」と言うとき、それは、その思想・理論と実技の二つの領域を持つ。教員志望の学生は、この二つの領域を学び習得しなければならない。二つのうち、とりわけ実技の領域は、大切である。実技を習得しその力量がなければ、どれほど教育方法・技術に関する思想や理論を習得していても、教師は、適切に授業・教育活動を展開できない。

今日、問題の一つは、「多くの学生はその思想・理論を学び習得するが、実技の習得が乏しい」ということにある。そのことは、例えば、英語教育の方法で英語劇の思想を学ぶ学生が、その劇の実技はほとんど習得していないことを思い浮かべれば分かる。また、道徳教育に関する科目でも同様である。道徳の教科化にあたって、歴史や指導法を学ぶ従来の道徳教育に関する科目や授業では、「道徳の授業を担える能力の育成に限界がある」とされ、「教科化に対応するためには、実践的な科目が必要である」³との声が上がっている。新学習指導要領では、「何を学ぶか」が中心だった従来の指導要領が転換され、「何ができるようになるか」すなわち「技能、技術」が、新しい時代に必要となる資質・能力として求められている⁴。先に教員養成の不十分さを述べたが、それは、具体的には、学生の学びや習得が思想・理論（＝知識）に偏っていて、実技の習得が乏しいということである。

本稿では、このような状況を踏まえて、「教育方法・技術」の「実技」の学び・習得の重要性に着目し、その実技の一つとして「大工仕事・弦楽器制作と合奏」を取り上げる。山口新聞は、この活動に注目し、「楽器づくり通し教員の質養う」との見出しで、次のように報じた。「梅光学院大学の子ども学部の子で学ぶ3、4年生13人が、1年がかりで4弦の弦楽器“バンドーラ”作りに打ち込んでいる。本格的なものづくりを通して教員の資質を養う新たな取り組み。ゼミを指導する同大専任講師の広瀬綾子さん（39）は“学生たちにモノ作りという原体験で苦労しながら、教員の資質につながる深い達成感や喜びを実感してもらうことが狙い”と話す⁵。

まず学生たちが学び習得すべき実技として、なぜ「大工仕事・弦楽器制作と合奏」を重視して取り上げるのか、その理由について述べ、次に学生たちが、その「大工仕事・弦楽器制作と合奏」をどのようにして学び習得するのか、その具体的な場面を明らかにしたい。そして最後に「大工仕事・弦楽器作りと合奏」という「実技」の学び・取り組みによって、教師の道を進もうとする学生たちがいかなるものを得たのかについて述べたい。

I 大工仕事・弦楽器制作と合奏を重視する理由

教育方法・技術の習得で国際的な評価の高い教員養成大学の一つとして、ドイツのシュトゥットガルトにあるヴァルドルフ教員養成大学が挙げられる。この大学で学生の教育方法・技術の習得にあたって重視されるのは、人間学、つまり子どもの本性とはいかなるものか、子どもは心の奥底ではどのような欲求を持つのかということについての学びであり、理解である。この大学の考え方を引き合いに出すまでもなく、教師を目指す者が教育方法・技術を習得しようとするとき、ぜひとも学び知らなくてはならないのは、子どもは成長しようとして心の中でどのような欲求を持っているか、ということである。なぜ大工仕事・弦楽器制作と合奏の習得を重視するのか、という問いに対する答えは、子どもの欲求がいかなるものかを知ることによって、導き出される。

それに対する答えは、このほかにもう一つ即ち、大工仕事・弦楽器制作と合奏が実際に子どもの成長にいかなる影響を及ぼすかを知ることによっても導き出される。

以下、これら二つについて述べたい。

1. 大工仕事・弦楽器制作と合奏への子どもの欲求

(1) 大工仕事への欲求

「日曜大工」という言葉がある。これは、大人が日曜日その他の休日に、のこぎり、金づち、ノミ、カンナ等の大工道具を使ってモノ作りを行う活動を示す言葉である。そこから分かることは、大工道具を使って、いわゆる大工仕事をしたいという欲求を持つ大人が少なくないことである。このような欲求は、しかし、大人だけにあるものではない。子どもを見れば分かるように、その欲求は子どもにもあり、大人が想像する以上に大きく強い。

子どもは、大人がのこぎりで板を切り、切り落としているところを実際に見ると、「ぼくもやってみてみたい！」と言う。大人が板切れにクギを金づちで打ち付けて箱を作るのをじかに見る子どもは、「わたしも自分で作ってみたい！」と言う。これは、家庭や幼稚園、保育園やこども園、小学校や中学校その他で見られる原風景である。このことから、子どもは大工道具を使って、モノを作る大工仕事への欲求を持っているとみなすことができる。子どもは、大工道具と材料と場を用意し、指導者がいると驚くほど大工仕事に熱中し、没頭する。

子どもが興味を示す大工仕事には、竹馬作りや本立て作りやイス作りなどさまざまなものがあるが、子どもが強い関心を示すものに、楽器、とりわけ弦楽器作りがある。

(2) 弦楽器・バンドーラ作りへの欲求

弦楽器作りとは、ギターを小さくしたような、4本の弦を張った長さ90センチほどの小型の弦楽器を作る活動のことである。この弦楽器は、バンドーラという。

この弦楽器作りでは、アスナロ、ツガ、ヒノキなど国産の木材をのこぎりで切ったり、ノミやノコヤスリで削ったり、電動ドリルで穴を開けたりして加工し、ボンドで接合し組立て、本体を作る作業が行われる。本体の完成後は、色やニスを塗り、棹の部分に指板を接合し、その後金具の糸巻きと弦張りのためのステンレス板をとりつけて弦を張って完成させる。制作にかかる時間は、約36時間～40時間である。胴部を制作者各自の好みの形で作ることができ、個性豊かで気品の漂う芸術的な作品である。音は、ギターとマンドリンの中間の、やさしく美しい澄んだ音色である。おもちゃの楽器のたぐいのものではなく、楽器店に並べても見劣りしない本格的な弦楽器である。

このような弦楽器・バンドーラの実物を見せ、制作のプロセスを説明し、実際に弾いてみせると、ほとんどの子どもが「自分もやってみたい、作ってみたい」と意欲を示す。弦楽器作りへの子どもの欲求は想像以上に大きいといえることができる。

(3) 音楽および合奏への欲求

バンドーラ作りの特徴の一つは、完成したバンドーラを弾くと、澄んだ美しい音が出ることであり、この楽器で子どもたちが好きな曲を自由に弾くことができ、仲間と合奏ができることである。シュタイナー学校（別名自由ヴァルドルフ学校）の創設者シュタイナー（Rudolf Steiner

1861-1925) が述べるように、児童期の子どもは、美しい音色やハーモニー、心地よいリズム、歌を歌いたい、楽器を演奏したい、といった音楽的なものへの強い欲求を持つ。完成したバンドーラおよびバンドーラを用いての演奏は、このような子どもの欲求を十分に満たすものである。

2. 大工仕事・弦楽器制作と合奏の子どもの成長への寄与

大工仕事、弦楽器制作および合奏は、これまで主として長野県の小学校や大阪の中学校で行われてきた。その小学校や中学校で実証されたことは、大工仕事と弦楽器制作と合奏が子どもの成長にきわめて良い影響を与えるということである。以下、このことについて述べたい。

(1) 大きな達成感と深い感激を与える

「やっと完成させることができた!」。弦楽器バンドーラを完成させたとき、子どもは大きな達成感を抱く。この達成感は、約40時間かけ、苦労して弦楽器を完成させて味わうものであるがゆえに、大きい。達成感は「感激」を伴う。この「感激」を子どもたちは時間をかけ、苦労してバンドーラを完成させた後に味わう。それは、心の奥深くまで浸透する感激である。子どもは、充実感や感激を味わえば味わうほど、何事にも意欲的になり、成長のエネルギーは大きくなる。

(2) 自己肯定感・自信を育む

すでに述べたように、子どもたちが作るバンドーラは、各自の好みの形をしたものであり、一人一人皆違った形の弦楽器である。それゆえ、音色や響きも皆異なる。バンドーラ制作の特徴の一つは、この制作が子ども一人一人のうちに、かけがえのない「私」の意識を成長させる大きな力をもたらすことである。楽器店で他人の作った楽器を購入しても、「私」という意識が成長することはない。この「私」は、世界に一つしかないバンドーラを作り上げた私であるがゆえに、「誇れる私」である。子どもが自分のうちに「誇れる私」を持てるようになると、自己肯定感が生まれ、生きていくうえでの「自信」を持つことができるようになる。

(3) 助け合いの心・協調性が育つ

バンドーラを作るにあたって、一人では難しい作業や、作業が思うように進まない子どもに対して、友人が手を差し伸べるなど、他人の手助けが必要な工程も少なくない。このようにバンドーラ作りでは子ども同士がお互いに助け合う。お互いに助け合うことで、子どもたちは助け合い、協力することの楽しさ、素晴らしさを実際に身をもって体験する。

助け合いや協力は、バンドーラを完成させた後、演奏の練習の際にもみとれる。子どもたちは、パート別に分かれて、お互いの音やリズム、ハーモニーを感じ、調和させつつ合奏するのである。

以上、「大工仕事・弦楽器作りと合奏」を、子どもの本性的な欲求という点、および子どもの成長への好影響という点から述べてきたが、そこから分かることは、この「教育方法・技術」を

学校教育に取り入れることが適切であり、重要であるということである。前述の長野県の小学校と大阪の中学校は、「大工仕事・弦楽器作りと合奏」を導入して大きな注目を集めたが、その導入は、このような認識に立っていたのである。

いうまでもなく、学校教育にそうしたいわば新しい「教育方法・技術」を導入するには、まず大学の教員養成で教員志望の学生に、「大工仕事・弦楽器作りと合奏」の理論・思想と実技の両方を習得させることが重要である。以下では、両方の内、実技の習得を取り上げ、実際にどのようにして学生たちがこの実技を習得したかについて、本学の学生の例を取り上げて述べたい。

II 教員志望の学生の「大工仕事・弦楽器作りと合奏」の学びの概要

本学の子ども学部子ども未来学科の学生たちは、3年次に自分の希望するゼミを選び、そのゼミ担当の大学教員のもとで、大学での学びを深め、4年次にはその教員の指導を受けて卒業論文・卒業制作論文を仕上げる。ゼミでは、学生たちはそれぞれ自分の学びを深めたいテーマを自分で決めるが、その選定にあっては、指導教員の助言をもとに行われる。

本学では、まだ「弦楽器作りと合奏」の授業は開講されていないが、筆者は、その教育方法・技術の概要については「子ども未来学入門」（1年次必修）、「教育方法と技術」（2年次開講科目、幼稚園・小学校教諭免許必修）などの授業で取り上げ説明してきた。筆者のゼミに所属する学生たちは、皆その概要すなわち「弦楽器作りと合奏」がどのようなものかを学んでいる。この学びのゆえであろう、ゼミでの学びのテーマ選定に際して、13名の学生が「弦楽器・バンドーラ作りと合奏」を取り上げ、これに関する「実技」を学ぶことに決めた。決めた学生の内訳は、3年生9名、4年生4名であった。4年生は「卒業制作研究」として、「弦楽器・バンドーラ作りと合奏」を選んだため、制作工程をその都度、写真に収めるなどして記録を取り、制作過程および制作の成果を卒業論文にまとめた。

週一コマ（90分）のゼミの中で、作業を進めていき、12月末には、全員が自分のバンドーラを完成させた。また、完成後は練習を重ね、年明けには本学の礼拝や本学付属の幼稚園（梅光学院幼稚園）でボランティア演奏を行った。これらの取り組みは、朝日新聞で「バンドーラ 手作りの音響けー4弦の楽器 子ども向け演奏会企画一」との見出しで、次のように取り上げられた。「“楽器を作って終わり”ではないことが特徴だ。手作りの楽器を携えて学校を回り、子どもたちの前で合奏するまでがセットになっている。広瀬さんは“体験した物づくりの喜びを子どもたちに伝えられる先生になってほしい”と、バンドーラ作りの効果に期待を込める」⁶。

1. 弦楽器・バンドーラの制作

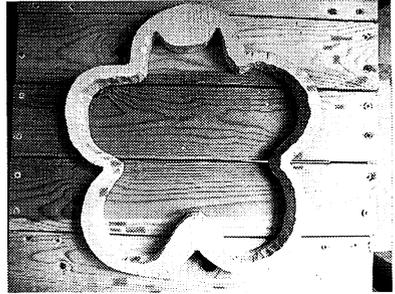
(1) 形を決める～内側をくり抜く

バンドーラ作りの作業の開始にあたって、まず学生が学ぶべきことは、どのような材料で、そのような工程で完成するのか、がイメージできるように、使用する木材、作業工程および完成したバンドーラそのものを直接に目で確かめ、手で触って知っておくことである。教員の指導で学

生たちは、まずこうした学習を行う。

次にバンドーラ全体の型紙を作る。その際、胴部の型紙の作成は念入りに行う。桜の花の形、リンゴの形、ちょうちょの形、貝殻の形……。胴部は、各自の好みや個性が最も発揮されるところであるがゆえに、その型紙作成は、時間をかけて行った。ある学生は、自分の名前に「花」が入っているので、花の形に決めたという。また、保育士を目指している別の学生は、ネコの形に決めた。将来保育園で、子どもたちの前で演奏する際、子どもたちが興味・関心と親しみをもてるように、との理由からである。型紙作成の際のポイントは、面積を最大限大きくとることである。こうすることで音の響きが良くなるからである。

型紙が出来あがった。それをアスナロ材の厚い板（縦31センチ×横30センチ×厚さ3センチ）に写し、のこぎりやノコヤスリ等を使って、その厚板を型紙と同じ形にする。その後、厚板の内部を、電動ドリルと廻しのこぎりを使ってくり抜く（写真①）。



写真① 厚板の内部をくり抜く

(2) 胴部に表板を接合し、力木をつけ、サウンドホールを作る

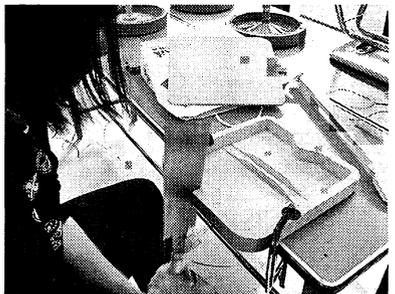
くり抜いた胴部の内側をノミで少し削り、ノコヤスリで胴部の内側を削ってなめらかにする。その次に、あらかじめ作っておいた表板をボンドで胴部にはりつけ、力木を二本つける（写真②）。力木のはりつけが終わったら、力木と胴部の上方部の間にサウンドホールを開ける。この穴あけに際しては「キリ」を使う。



写真② 力木をつける

(3) 胴部の上方に溝を作り、棹を接合し、裏板をはる

あらかじめ作っておいた棹の部分の溝に胴部の溝に接合すると、弦楽器らしい形が出来上がり、完成の一步手前まで来たことが実感できるが、その接合のための溝づくりは、細心の注意が必要とされる。その溝は、胴部の上方部に作る。この溝は、「縦（深さ）3センチ×横3センチ」の「コ」の字型であるが、作るに際しては、のこぎり、電動糸のこぎり、ナイフ等を使う（写真③）。



写真③ 棹を接合する溝を作る

溝づくりが終わったら、この溝に棹の部分をボンドで接合する。接合が終わったら、裏板をはる。これが済み次第、バンドーラ全体をノコヤスリや紙やすりなどを用いて



写真④ 色塗り

丁寧に磨く。

(4) 色塗り、ニス塗りおよび指板づくり・接合

ヤスリでいねいにバンドーラ全体をみがいた後、まず表板、裏板および棹の先端にハケで色を塗る（写真④）。それが済んだら、ニスを6回ほど塗る。1回塗ったら15分～20分の乾燥時間が必要である。そのため、この乾燥時間を利用して、棹に接合するための指板を作る。

色塗りとニス塗りが終わったら、棹にボンドで指板を接合する。

(5) 糸巻きとステンレス板を取り付け、弦を張る

指板を棹に接合した後、棹の先端部にドリルで4個穴を開け、そこに金属製の糸巻きを取り付ける。次にステンレス板を金切りばさみで切って、胴部の下方に取り付ける。この取り付けが終わったらコマをセットして、弦張りを行う。弦は、マンドリン用の弦を4本そろえ、これを適切に張る。

張り終わったら、弦を太いものから細いものへと弾いていくと、ソドミソと音が出るように、調弦器を使って調音する。これが終わるとバンドーラの完成である。完成後は、弾き方の練習と合奏の練習へと進む。

以上、学生たちがバンドーラ作りに従事し取り組み、完成に至った工程・過程の概要を述べた。概要は上述のとおりであるが、完成に至るまでのなかで、学生たちは多くの困難な作業、失敗とやり直し、不十分な出来栄えの制作、ケガその他さまざまなことに会った。これらのことを含む「大工仕事・弦楽器作りと合奏」への取り組みは、学生たちにとっては、これまでの人生で経験したことのない初めての実技の学びであったが、その学びのなかでかれらが習得し感得したことは多い。以下では、これらのことについて述べたい。

Ⅲ 学生たちは「バンドーラ作りと合奏」で何を習得・感得したのか

学生たちが、この実技の学び・取り組みで得たことは、大きくは、次の5つに要約することができる。

1. 大工道具の使い方の習得と弦楽器の制作方法の習得

バンドーラ作りでは、大工道具を頻繁に使う。のこぎり、ノコヤスリ、電動糸のこぎり、ノミ、電動ドリル、廻しのこぎり、切り出しナイフ、ペンチ、金切りばさみ、ネジまわし、金づちなどである。これらの道具を使うにあたっては、小学校のときのこぎり、電動糸のこぎり、金づちを使用した経験のある学生が数名いただけであった。本学では、小学校教諭の免許を取得するにあたって「図画工作科の指導法」が必須であるが、現在、この授業では、絵画鑑賞や美術教育史の学び、水彩絵の具などを用いた絵画制作が中心となっている。のこぎりや金づちを使った

活動はほとんど行われてない。また、他の道具の使用経験のある者はゼロである。ほとんどの学生にとって、万力やノコヤスリ、電動ドリル、金切りばさみなど初めて見る道具が多く、なかでも電動糸のこぎりや電動ドリルなどの電動機器を初めて使ったときは、恐怖心や緊張感を感じたという。

とりわけ、「電動糸のこぎり」を使用する際には、学生たちの大半に戸惑いと恐怖の色が見て取れた(写真⑤)。小学校学習指導要領「図画工作」の中で「電動糸のこぎり」は、小学校5、6年生で使用すべき工具の一つとして挙げられているにもかかわらず、使用したことがないという学生も少なからずいた。学生は次のように振り返る。「糸のこぎりを使うことが怖く、なかなか作業に入れませんでした」、「私は糸のこを使用したことがなかったので、怖いという思いがあり、どのくらいの力加減で動かせばいいのかかわからず、何度も針を折ってしまった」、「糸のこを使う際、カーブが多いところはとても手こずってしまった」。

他の道具についても、学生が悪戦苦闘しながら取り組んだ様子がみとれる。「電動ドリルも最初は思うように穴を開けることができず苦労した」、「板をヤスリで削る作業でも苦戦しました」、「ノミにハンマーとしばらくの間使っていなかった道具ばかりだったので、手をケガしたり、だいぶひどいことになった」(写真⑥)。しかし、学生たちは

徐々に道具や工具に慣れ、コツを掴み始めた。ある学生は次のように述べる。「コツが分かってくると、作業も自然と楽しくなり、モノ作りをする喜びを味わうことができた」、「スムーズに作業できるようになると完成形に近づいていくのが分かり、できない悔しさから嬉しさに変わりました」。

作業が進むにつれ、学生たちの道具や工具に対する戸惑いや不安は、次第に解消されていった。ある学生は次のように述べる。「この頃には、電動糸のこぎりを使うことに恐怖心はなく、どうしたら上手に切れるか、それまでの経験を生かし取り組んだ」。また、ある学生は「使う際の注意点はどこだろうか」と、考えながら作業に取り組んだという。この学生は、「やすりにはノコヤスリ、紙やすり、鉄鋼やすりなど様々な種類があり、使う部分によって自分で判断し、使い分けることが出来た」と述べ、さまざまな道具を使うことによって、自分で考え判断する能力が身についたと振り返った(写真⑦)。学生たちは、道具を使いこなし、作業がスムーズに進む心地よさを実感していったが、それだけではない、彼らは、適切な道具を使えばいとも簡単に切



写真⑤ 電動糸のこぎり



写真⑥ 金づちやノミを使いこなす



写真⑦ ノコヤスリ、紙やすりなどを使う

れたり削れたりすること、すなわち用途に適した道具に対する感嘆や敬意の念をも持つに至ったのである。

さまざまな道具や工具の使い方を習得すること、すなわち実技を習得することは、学生自身が教員となったときに、子どもたちに教える技術を身につけるとのことである。このことの必要性を学生は次のように述べる。「子どもに指導するにあたって、自分が実際に工具に触れ、使用することは大切だと感じました。教師が道具を使いこなすことができなければ、指導することもできないと思う」、「図画工作や総合的な学習の時間で工作をしたり、何か作ったりするときに、先生はこんなものを作ったことがあるよと伝えたり、のこぎりや糸のこぎりを使う時に、どういったことに気をつければよいかを細かく教えることができるのではないかと思う」、「(鉄板に電動ドリルで穴を開ける際)溶けたステンレス板が自分の方に飛んできた。しかしこのような失敗も教員を目指す上で必要であると思う。教師が危険なことや留意点を把握しておくことは重要であるからである」。教育方法・技術の習得とりわけ実技の習得で重要なのは、まず学生自身が実際にその実技を行い技術を身につけると同時に、失敗や苦労を重ねるなかで、その楽しさや奥深さを実感することである。

2. 時間をかけ苦労して自分が作ることの大切さ

欲しいものは、お金を出せば何でも手に入る、また、スピーディーに即座に手に入る時代である。「できあがったもの」が簡単に手に入る」状況のなかで、学生たちは、時間をかけて、自らの手で一から作品を作り上げる意義について、「物を一から作ることの楽しさ」、「自分の手で一つのことをやりとげる体験はなかなかなく、貴重な経験」、「どこかの楽器屋で購入したものではなく、一から自分で作ったからこそ感動があった」と述べた。

すでに述べたように、完成に至るまでには、多くの失敗や困難があった。ある学生は、「最初は落ち込んだが、やり直せる部分は一から作り直したり、先生に助けてもらい可能な限り修繕したりと、失敗を乗り越え前に進む力がついたと実感している」と述べ、作業を通して失敗を恐れず挑戦する力がついたという。また、「いろいろな苦労を重ねながら最後まであきらめず努力することで、無理だな、大変そうだなと思う事でもやり遂げることができる事実に感動した」と学生が述べるように、失敗や困難を乗り越え苦労しながら、バンドーラを完成させたことは、学生に自信をもたらしたことがみてとれる。ある学生は、「世界に一つしかない自分だけの楽器を苦労しながら長い時間をかけて作ることで、達成感を味わい、自身や意欲を持てるようになり、愛着も沸いてきます。人としても成長することができたと思います」と述べたが、これは「自分ができるんだ」、「ド素人の私たちでも本格的な楽器が作れるんだ」との自己肯定感をも育むことを意味するのである。

3. 感激と達成感

学生たちをみていると、作業工程でそのつど「感激」や「達成感」の体験があったことがみてとれる。糸のこぎりを使用する際に何度も失敗を繰り返し苦労したがゆえに、うまくいった時の

「感激」、思い通りの形になった時の「感激」、電動ドリルで本体の内側をくり抜いたときに感じた「達成感」などである。なかでも学生に大きな「感激」と「達成感」をもたらしたのは、約8ヶ月という長い時間をかけてバンドーラがやっと完成したときである。その「感激」と「達成感」を、ある学生はレポートの冒頭で次のように記す。「バンドーラを約8か月かけて作り、できたときの嬉しさや達成感は今までにないぐらいに大きいものでした」(写真⑧)。



写真⑧ 完成間近のバンドーラ

さらに学生に「感激」と「達成感」をもたらしたのは、自分が作った楽器から音が出たときである。「きれいな音が出ている、と感じたとき、私はとても感動しました」。そして、練習を重ね、皆で演奏や合奏を行うときの「感激」である。「自分で作った楽器の演奏を人に聞いてもらうのはこんなに嬉しく、やりがいのあるものかと思った」との学生の言葉が示すように、作り上げることを通して得た感激や達成感は、演奏や合奏を行うことでさらに強められる。すでに述べた梅光学院幼稚園でのボランティア演奏は、山口新聞で「弦楽器手作り 梅大生演奏会一園児の笑顔に感激」との見出しで、次のように取り上げられた。「梅光学院大学子ども学部のゼミで学ぶ3、4年生13人が、手作りの弦楽器“バンドーラ”を使った演奏会を梅光学院幼稚園で開いた。学生は「ふるさと」「エーデルワイス」など5曲を披露。仲間と一緒に澄んだ音色を響かせるなどし、全園児90人と交流を深めた。幼稚園教諭や保育士を目指している3年の岩崎優香さん(21)、浦田花菜さん(21)は“苦労を重ねて作った楽器を演奏できるなんて夢のよう。合奏で子どもたちが笑顔になってくれてうれしい”と感激した様子⁷⁾。

この「感激」についていうと、本格的な「大工仕事」を教育活動の一環として重視しているシュタイナー学校の創設者シュタイナーは、「教師は“感激(Begeisterung)”を持たなければならない⁸⁾と述べ、教師が「感激」をもつことの必要性・重要性を強く主張する。教師自身が心震わせた経験すなわち「感激」が、子どもの内に新たなことを知り、学び、体験することの「感激」を呼び起こすという。

感激や達成感を味わうことは、学生たちのうちに子どもの教育への意欲を湧きたたせずにはおかない。「感激」は、教師が適切な教育方法・技術で実り豊かな授業を展開できるための必須のことがらである。教師自身が「感激」を持つことがなければ、子どもの心に響く授業を行うことはできないからである。

4. 協力と助け合いの大切さの実感——道徳性の成長の実感

各々で異なる進み具合や、もくもくと作業を行う制作過程を一見すると、バンドーラ作りは個人作業のようにも見て取れる。しかし多くの学生が、「バンドーラ制作は一人では絶対にできない」と述べる。作業過程では、道具の譲り合いはもちろんのこと、分からないことを教え合ったり、作業が進んでいる学生が遅れている学生にアドバイスやコツを教えたり、一人では難しい作

業を二人で協力して行ったりする姿が随所に見受けられた。ある学生は次のように述べる。「私は特に、初めて使う糸のこの作業に苦戦し何度も刃を折ってしまいました。そういったときに先輩や友達が刃を取り替えてくれるなど助けてくれ、仲間と協力する大切さを感じました」。

すでに述べたように、完成後は、本学の礼拝や本学付属の幼稚園（梅光学院幼稚園）でボランティア演奏を行った。協力と助け合いは、合奏の練習の際にもみてとれた。「演奏する際にも一人で弾くのではなく、皆と一緒にになって演奏するので“皆と合わせなくては”という思いが出て、一体感が生まれてきます」、「パート別に分かれ、一人一人がきちんと練習をし、みんなが合わせようという気持ちを持って臨んだ結果、良い方向に進んだと私は思った」。

それだけではない、ある学生は「ゼミのみんなと話しやすい、そしてゼミ全体がまとまっているのは、バンドーラ作りがあったからではないか」と振り返る。この学生の言葉は、学生同士の協力や助け合いが、互いに支え合い協力し合う良好な集団づくりにつながっている、ということの意味している。このような集団づくりは、いじめや学級崩壊とは無縁のクラスづくり、学級経営を目指す上できわめて重要である。

いうまでもなく、助け合う心の育成は、道徳教育の重要な課題の一つである。道徳の教科化にあたっては、「考え議論する」道徳教育が目指されているが、これだけでは、助け合う心の育成は難しい。その心を育てるには、単なる言葉や思考、話し合いや議論ではなく、実際に助けたり、助けられたりする体験を持たなくてはならない。上述のように、作業や合奏の練習を通して、学生たちは、他人を思いやり、お互いに助け合い、協力することを身を持って体験し学んだのである。

5. 新しい教育実践を行うことへの意欲の高まり

バンドーラ制作と合奏の実技の学びで学生たちが得るものの一つは、長い時間をかけ、苦勞して弦楽器を完成させたことで得る達成感や感激に基づく教職への意欲の醸成である。学生の一人は、「子どもたちに、自分で考え、苦勞しながらも挑戦し一つのものを作り上げたという経験をさせたい」と述べた。またある学生は、時間をかけて自身が体得した「できた！わかった！」を子どもたちに教えることで、子どもの主体的に取り組む態度や、活力をもって日々の生活を送る力を育てたい、と抱負を語る。別の学生は、「自分が幼稚園教諭になった際には、何事にも諦めずに努力する子どもを育てたい」と述べる。「大きな音に敏感な子どももいるので、バンドーラのような優しい音色は子どもたちにもいいと思う」として、幼稚園でのお遊戯会や保護者との交流会で演奏したい、という学生もいる。ある学生は、「幼稚園や保育所の生活発表会でバンドーラを演奏し、リコーダーや鍵盤ハーモニカ以外にもこのような弦楽器があることを知ってもらいたい」と述べ、「子どもたちに実際にバンドーラに触れさせて、楽器に対する興味を持たせ、音楽を今まで以上に好きになって欲しい」と希望を語る。自分が小学校の教員になったとき、バンドーラを朝の会で弾き、一日のはじまりを充実したものにしたい、と意欲をみせる学生もいる。学生のこのような思いは、言い換えれば、新しい教育実践を行うことへの意欲の表れである。バンドーラ制作と合奏を通して、学生は感激、達成感、自信、自己肯定感などを身につけたが、そ

れは、さらに新たなことへの挑戦の原動力となっていることがわかる。

おわりに

以上、わが国の教員養成の不十分さを取り上げ、その一つが「教育方法・技術」の学びの偏り、すなわち実技の学びが軽視され、思想・理論に重点が置かれている点を指摘し、その点を改善する方途の一つとして「大工仕事・弦楽器作りと合奏」の実技の導入について述べた。この導入の根拠は、子どもの本性から出る欲求の充足およびその充足の子どもへの好影響にある。

「大工仕事・弦楽器作りと合奏」に実際に取り組んだ学生たちは、のこぎり、ノコヤスリ、ノミ、電動ドリルなど様々な大工道具を使用し、一枚の厚板をもとにさまざまな大きさの木材を切り、削って、接合して、長時間の作業の末、一人一台、弦楽器・バンドーラを完成させた。

こうした実技の学びで学生たちが得るものは主に二つある。一つは、大工道具を使い、木材を加工して弦楽器を制作する技術の習得である。もう一つは、長い時間をかけ苦勞して弦楽器を完成させたことで得る達成感や感激およびそれに基づく教職への意欲の醸成である。

「弦楽器作りと合奏」は、もし教師がこれを習得し、学校現場で活用した場合、大きな教育的な効果をもたらす教育方法・技術である。このことは、すでに長野県の小学校や大阪の中学校で実証されている。

今日の教員養成の不十分さを改善しようとするとき重要なことは、教育現場で用いられているすぐれた教育方法・技術に学びつつ、それを大学の授業等に取り入れて、学生に教師としての力量をつけさせることである。「弦楽器作りと合奏」は、長野県の学校現場から生み出され、その適切さが実証されたものであるがゆえに、大きな説得力をもつ「教育方法・技術」である。教員志望の学生がぜひとも学ぶべきものの一つであると思われる。

付記

筆者の4年ゼミ生4人は、バンドーラ制作を「卒業制作論文」としてまとめた。また、3年ゼミ生9人には、バンドーラが完成した後、「バンドーラ作りを終えて」というテーマでレポートを書いてもらった。本文中のカギカッコ内における学生たちの感想や意見は、彼らの卒業制作論文やレポートのなかで注目すべきものを取り上げて記したものである。なお、本研究は、平成28年度梅光学院学術研究助成による成果の一部である。

注

- 1 林純次『残念な教員—学校教育の失敗学』光文社、2015年。
- 2 朝日新聞2016年11月17日付朝刊「新学習指導要領 審議のまとめどう見る」
- 3 読売新聞2017年1月20日付朝刊「学生が授業づくり実践」
- 4 西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計—パフォーマンス評価をどう活かすか』図書文化、2016年、14頁。
- 5 山口新聞2016年12月24日付、地域総合ページ「楽器作り通し教員の資質養う—梅光学院大の子

ども学部ゼミ生一」

- 6 朝日新聞 2016年12月17日付朝刊（下関版）「バンドーラ 手作りの音響けー子ども向け演奏会企画一」
- 7 山口新聞 2017年1月20日付「弦楽器手作り 梅大生演奏会一園児の笑顔に感激一」
- 8 R. Steiner, *Die Methodik des Lehrens und die Lebensbedingungen des Erziehens*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach / Schweiz, 2004, S.119

引用・参考文献一覧

- ・朝日新聞 2016年11月17日付朝刊「新学習指導要領 審議のまとめどう見る」
- ・朝日新聞 2016年12月17日付朝刊（下関版）「バンドーラ 手作りの音響けー子ども向け演奏会企画一」
- ・朝日新聞 2017年1月20日付朝刊（下関版）「手作りの楽器に園児らドキドキ」
- ・林純次『残念な教員一学校教育の失敗学』光文社、2015年。
- ・広瀬俊雄監修、藤林富郎、池内耕作、広瀬綾子、広瀬悠三『感激の教育』昭和堂、2012年。
- ・文部科学省「小学校学習指導要領」第2章第7節、図画工作、平成20年3月告示、平成27年一部改正。
- ・西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計一パフォーマンス評価をどう活かすか』図書文化、2016年
- ・R. Steiner, *Die Methodik des Lehrens und die Lebensbedingungen des Erziehens*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach / Schweiz, 2004.
- ・山口新聞 2016年12月24日付、地域総合ページ「楽器作り通し教員の資質養う一梅光学院大の子ども学部ゼミ生一」
- ・山口新聞 2017年1月20日付「弦楽器手作り 梅大生演奏会一園児の笑顔に感激一」
- ・読売新聞 2017年1月20日付朝刊「学生が授業づくり実践」